

この世の真実が見えてくる

まじめに、そしてゆかいに世の中を見つめる——幸福論・国家論から青春時代の思い出まで。そして著書未収録のまま残されていたパロディをよりすぐって収める

【本文より】

*政治を他人事のようにテレビで見物してすませてしまうのではなく、普通の人がたちが体ごと政治にぶつかって行っていた時代もあったのだ。戦後史にあのような時代のあったことを、日本人の一人としてわたしは密かに誇りに思う。

【あのころのデモがあんなにも烈しかった理由】(東京△一九九四年八月号 都市出版)より
*あらゆる国家は過去において必ず間違いを犯す。悲しいことだが、これは避けられない運命である。しかし、ここから先が、その国民の質と未来を決定する。(後略)

【愛国者と売国奴】(不破哲三「歴史教科書と日本の戦争」巻頭特別寄稿 二〇〇二年一月 小学館)

*戯曲を書くときに、いつも視点を「人間は蜂蟻や蚊とんぼと同じようにやがて間もなく死ぬべき存在である」というところに置いておくことを思い出した。

【週単位・三年単位・一生単位】(波 一九七二年九月号 新潮社)より

客席のわたしたちを圧倒する

生涯を通して、愛し、観つづけた映画、芝居、そして野球——黒澤明・藤純子・馬場のぼる・ひよこりひよたん島・スワローズ・野茂・イチローなどに寄せる思いを、熱く綴る

【本文より】

*いい芝居は観客の心を動かし、そのことに励まされて俳優は信じられないような力を発揮し、それをまた観客が感じとって……という具合に、芝居小屋では俳優と観客とが力を合せてその演目の質を高めていくこともしばしば起り得るのである。「観客なしには絶対に完結されぬもの」——これがどうも演劇の本質のようだ。そして「観客なしには絶対に完結されぬもの」を、ともかく一応前もって完結させた形で作りあげざるを得ぬところに、演劇のむずかしさがあるらしい。

【め・芽・眼】(新劇 一九八六年六月号 白水社)より

*野茂投手のすばらしさは、頭の中には野球しかなく、祖国日本もへったくれもないところにある。彼はただ自分の力がどこまで通用するのか、それを最高の舞台で追求しているだけなのだ。

【問答録】(Number 1 一九九五年八月三日号 文藝春秋)より

まるまる徹夜で読み通す

ことばへのこだわり、読むことへのこだわり——本の帯、内容見本、パンフレット、広告などに掲載の膨大な推薦文から百本を一挙掲載。ことばさまざま、広辞苑への愛など

【本文より】

*存在するのは「おれの英語」に「おいらのフランス語」に「拙者のインドネシア語」に「わたしの日本語」——それだけである。

【正しい英語】はあり得るのか(月刊ことば 一九七八年二月号 英潮社)より

*時との戦いは常に人間に不利だが、しかしどうあっても全人類の総合的智恵は古典を守り通さなくてはならないのだ。でなければ、人間は人間でなくなってしまうだろう。そして古典を守るとは、つまり古典を読むことにはかならない。

【世界古典文学全集】全五十巻・五十四冊(筑摩書房)内容見本より

*大衆芸術家の仕事は、大衆に媚びることではなく、大衆がそれとは知らずに持っている叡智を探り出し、それにはつきりした形を与えることだろう(後略)。

【添田亞輝坊・知道著作集】全五巻 別巻一(刀水書房 一九八一年刊行開始)内容見本より

さらに発掘を続け、著書未収録のエッセイを三冊に編みました!

井上ひさし

(1934~2010)



著者略歴

山形県東置賜郡小松町(現・川西町)生まれ。上智大学卒。放送作家などを経て、作家・劇作家となる。「手鎖心中」で直木賞受賞。小説・戯曲・エッセイと活躍の場を広げ、数多くの作品を発表。その傍ら社会的な発言も積極的に行い、「九条の会」呼びかけ人なども務めた。『井上ひさし発掘エッセイ・セレクション』全3冊、『井上ひさし 短編中編小説集成』全12巻(いずれも岩波書店)など著書は多数刊行され、今も読み継がれている。

刊行にあたって

著書未収録のエッセイを選び抜いて収めた「井上ひさし発掘エッセイ・セレクション」。ご好評にお応えし、ここにその第二弾を刊行いたします。

発掘の元は、同姓同名であったが故に〈井上ひさし研究者〉となった井上恒氏の手による「井上ひさし著作ファイル」です。

そこには、単行本、文庫、全集はもとより、新聞記事、雑誌連載、会報誌・機関紙・内容見本・書籍の帯への寄稿、講演録、対談・座談など、長年にわたって丹念に収集された膨大な数の作品が収められています。その中から、新たな三冊が誕生しました。